九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 森山隆著『上代国語の研究ー音韻と表記の諸問題ー』

崎村，弘文
鹿児島大学助教授

https://doi.org/10.15017/11970

出版情報：語文研究. 63, pp.63-66, 1987-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《紹介》

# 森山隆著『上代国語の研究 ―音韻と表記の諸問題―』

崎村弘文

本書は、上代日本語の研究に確固とした歩みを続けられながら遂に積年の病魔との闘いに倒れられた著者の、遺稿集と言うべきものである。

しかし、そういう事情を知らずしてそこに掲げられた諸論考を読む者は、これを、前著『上代国語音韻の研究』の姉妹篇として用意されていたものと見るであろう。

上代語研究の多彩な問題をめぐる論考が展開されているが、各々非常によく関連し、著者の関心が常に「表記の限界を超えて音韻の実態を明らかにする」という点に有ったことを明瞭に示している。

即ち、

1、上代における連母音[ai]の転化について
2、上代ア列音節の有尾韻字による表記について
3、上代仮名づかいはいかなる意味をもつか――最近の学説を通して――
4、在唐記梵字註の構成とその解釈
5、悉曇口伝のハ行関係記事の解釈
6、変字法と清濁表記との交渉――万葉集における――
7、万葉集巻二十防人歌の清濁表記――その用字法的背景――
8、書記本文の字音仮名について――固有字母・清濁表記の実態――
9、上代における動詞の連濁について
10、萬葉集東歌に見える「可牟」の語形について――東歌・防人歌の音韻的環境――
11、上代ハダ・ハナハダ私考
12、萬葉集の二、三の人名表記について――付、「兎」「甚」など――
13、萬葉集所出人名の通用表記について
14、上代人名の略記について
15、奈良時代の人名表記に反映した上代仮名遣――その混用例について――
16、大宝二年戸籍記載の人名について――長幼の序列表記私見――
17、養老五年下総国大嶋郷戸籍人名の方処的性格
18、上代「是」字の不読的用法について

の如くである（番号は紹介者付す）。

1〜3は上代語の母音に関するもの、4・5は子音（いわゆるハ行頭子音等）に関するもの、6〜9は＜清濁＞に関するもの、10〜17は人名を中心に語形の問題を取り扱ったもの、18は漢文表記と読解との問題を取り扱ったもの、である。

いずれも、上代語に関して常に問題となるところを論じられたものであるが、和・漢・梵に亘る広範な資料・論著を博捜しての用例検討とともに、音韻・音声に関する一般言語学的知見を利する方法が採られており、奥行き広く論が展開されている。特に、17などは、〜マロ・トジメといった人名に対する好尚が地域によってかなり異なっていた事実を指摘したものであり、一面で方言地理学に通ずる側面をも持つ興味深い論考である。

いま、如上の分類に沿って本篇の趣旨をおおよそ紹介すれば、次の如くである。

1〜3：「上代語における連母音[ai]の忌避に際してëが生ずる場合、それを促す背景として、従来説かれていたのとは逆のa→ëの転化現象が存在していたと考えられる。」「後代のアに相当する上代語母音の音価は後舌的なものではなかったのではないか。」とするのが、前二者の結論。第三者は一九七五年以降に起きた「上代語母音が音韻論的にはいくつ有ったか」をめぐる論争について、独自の立場から論評を加えたもの。各々、示唆するところが多い。

4・5：「慈覚大師円仁の『在唐記』梵字註は、音声観察記録として従来考えられていたほど厳密かどうか問題が有り、再検討を要する。例えば、＜本郷波字音＞はPを示すものと解釈すべきであろう。」「心蓮の『悉曇口伝』に見えるハ行頭子音関係の記事は、Fでなく＜唇の内分を合わせる＞Pを示すものと思われる。」

6〜9：「＜波婆カル＞の如く、変字法に関わる清濁両音節連接語の表記例を検討してみると、濁表記字母による表記は、表記者が＜きはめて明確に（清濁を）書き分ける意図を持ってゐた＞ことを示す。」「防人歌の表記を用字法的観点から再検討してみると、イ、常用字母と特殊字母の関係、ロ、同字法と変字法の問題、ハ、清濁表記の問題の各々について、＜いかにも中央官人の手になるものとして、中央語系の歌群の場合と同様の信憑性を持ち得ることが判明＞する。特に、清濁表記については、＜一般的傾向として…濁音節はこれを濁音字母で表記しようとする傾向がやはり存在していた＞と推測される。」「書紀本文の字音仮名の使用傾向を見ると、＜歌謡字母群の字種の上での特徴である（イ）巻十三以前と巻十四以後とに別れて異なった字種が現れること、（ロ）各巻のそれぞれの歌謡群に独自の字種が現れること、の二つの大きな特徴は、＞＜同一の平行現象として現れてこない＞。また、清濁表記に関しても、＜本文独自の傾向を見出すことができる。＞」「連濁・不濁両例を持つ動詞20語の連濁化傾向を見ると、＜連濁化傾向にある下接動詞は、その名詞形・サ変動詞形においてもっとも連濁の形をとる。ただし、その場合、…連用形よりも未然形や助動詞「リ」の付いた形に早く連濁形の現れる場合もある。＞」

10〜17：「東歌に見える＜可牟＞の語形は、東歌・防人歌・中央語系の各々においてï〜u交替・i〜u交替の現象が存し、特に人名表記の例の中に上＝カムの形が見えることから、＜上＞に擬することができる。」「ハダは、ハナハダとの語義・語法の共通性から見て、その語形成に参加したことが考えられる。その筋道としては、ハダ→（ハダハダ）→ハナハダと考えるのが最も確実ではなかろうか。」「万葉集以外の文献に見えない人名中、手がかり乏しく訓みづらいものについても、＜上代の人名表記の一般的傾向を知れば…より確実な訓みを推定できる場合＞が有る。例えば、＜津守連通＞はミチ、＜丈部黒當＞はクロマサ、＜船連秦勝＞はハダカツであろう。」論考13は、『萬葉集』所出の人名につき、他書の表記例をも参看してその通用表記の実態を明らかにした労作。一々の結論については、論考そのものを参照されたい。「＜（一）上代の人名表記に際して、とくに「名」の構成要素の中で接頭・接尾的部分が省記される傾向にある。（二）人名の略記を志向する際に、まず「氏」のみの型が一般的であるが、弁別のために「名」を略して付加することが行なわれる。その略記法には一定の傾向が見受けられる。（三）右の（一）（二）に属しない型はやや特殊とも言えるものでそれぞれの個別的事情が考えられると思われる。＞」「＜（イ）奈良時代を中心とする人名表記には、キ・ゲ・ヘ（べ）・ト・ノの各音節に上代仮名遣の混用の例が見える。（ロ）…キ音節ではキ乙→キ甲表記の傾向が看取できるし、ノ音節においては逆にノ甲→乙表記の傾向が見られるようである。（ハ）…右の事例で見る限りにおいては、奈良時代の後半にかけて、キ乙音節はキ甲化の傾向があり、ノ甲音節はノ乙化の傾向を見せた時期があったことを推測できるのではなかろうか。＞」「＜一、命名に際して、親子の間では両者の緊密な関係を表すような命名法はそれほど明瞭には認められない。一、兄弟・姉妹の関係においては長幼の序列的表現が認められる。おもに「大―小」「兄―弟」「（老）―若」などの対比的接頭語を使用するが、これらの対比的接頭語は、序列表現とは独立して愛称的接頭語としても単独で多用される。とくに「小」の使用は顕著である。一、多数の兄弟・姉妹の統一的序列表現はほとんど存在せず、対比的表現に依存する形なので、結果的には二人一グループの反復の形をとる。…」論考17については、上記参照。

18：上記参照。

なおこの後に、[付]として、「接続助詞「を」の機能について――今昔・宇治拾遺の共通説話の比較から――」と題する論考一篇が加えられている。

著者の三十年に及ぶ営為の一証ながら、実に峨々たる山稜を見る思いがするのは、紹介者ばかりではあるまい。しかも、最も早いものでは一九五七年に公刊されていながら、その内容に聊かの古びも無く現在の研究者を裨益し刺激している。

もちろん、中には、観点の相違によって異説を立てる余地の有るもの・その後の研究の進展に照らしてさらに論拠を加える必要の有るものも存するが、それもまた、或る意味で後学に刺激を与えるも

のであることは言うまでもない。

著者は、上代語・訓点語の研究に多大の業績を有する福田良輔・春日政治・春日和男・村山七郎といった方々の薫陶を受けられ、鶴久氏ほかの同学の方々と、九州の地に上代語研究の灯をともし続けて来られた。そのともし手を失った痛手は大きい。

末学の者としては、ここに氏の御冥福を祈るとともに、氏の周辺に在って本篇の刊行に意を注がれた方々の厚誼と悲しみに思いを致すばかりである。

（昭和六十一年十一月一日・桜楓社刊、三四六頁、一五〇〇〇円）